

リクルート「就業意識に関するアジア学生調査」結果報告

内向き,大企業志向, 日本とアジアでギャップ明らか

小山 秀幸 (株)リクルート アジア斡旋事業推進室 新卒グループ ジェネラルマネージャー

高まるアジア採用熱が 調査の背景

日本国内の市場飽和に伴い、海外での事業展開を強化する企業が増加している事実は誰もが否定しない潮流であろう。事業のグローバル化に伴い、本社人材のグローバル化は不可避の流れであり、海外新卒の本社新卒採用に各社が取り組み始めている。この流れを受けてリクルートでは「Work in Japan」というサービスを2010年度よりスタートした。アジアのトップ・スクールに学ぶ大学生と、日本本社での採用を約束する企業とをマッチングするサービスである。昨年11月の上海・北京でのイベントにはさまざまな業界から22社が参加、2日間のイベントで約50名が内定し、その他サービスも含めて、現在までに累計で約70名が内定を承諾するにいたっている。採用された学生は、北京大学、清華大学、復旦大学、上海交通大学など、現地の最難関校を卒業予定の学生が大半であり、企業からは「金鉱を掘り当てた」、「学生の優秀さに舌を巻いた」と評価いただいている。

こうした各社の採用背景には、国内新卒学生とのミスマッチと、理工

系人材の不足がある。「新興国での海外勤務などを志向するアグレッシブな学生と出会えない」「IT、機械、電気・電子系を専攻する学生が減っている」との企業の声それが代表している。他方、目を中国に向ければ、海外でのキャリアに目を輝かす上昇志向の強い学生、理系学生が圧倒的に多く存在する。中国では日本の10倍の毎年630万人が卒業し、その半分は理系である。勉強量も圧倒的であり、講義では学生が最前列の確保に執心し、大学の成績を証明するGPA (Grade Point Average)を競い合う。夏休みには、4~8週間の企業の職場参加型インターンシップに数社参加する。そのようなトップ・スクールの優秀学生が「日本で就職したい」と手を挙げるのであるから、企業担当者の驚きは想像に難くないだろう。

さて、この話は中国に限らない。筆者は香港、シンガポール、韓国、台湾のトップ・スクールを訪問し、学生とのインタビューを重ねたが、勉強熱心で海外での活躍を希望する上昇志向の強い学生の多さに驚いた。こうしたアジア各国/地域の学生と、日本の学生のキャリア・イメージや、グローバルに働くことへの意識を把

握するために、リクルートでは、「就業意識に関するアジア学生調査」を実施した。今回は、この調査結果に表れている各国/地域の学生の就業意識の傾向を報告することで、大学におけるグローバル人材の育成の参考に供したい。

日本とアジアの学生は就職先としての国や地域を検討しているか

では、まず、日本およびアジア各国の学生が、自国およびそれ以外の地域について就職先として考えているかどうかの国際比較を試みたい(図表1)。

中国を除くすべての国で、自国の民間企業への就職を考えている学生が最も多く、次いで、自国の公務員が多い。特に香港は9割強の学生が公務員志望である。(ただし、中国は、日本での就職を検討する学生向けサービスの登録者が対象、日本は、民間企業の求人が多くを占める就職情報サイト「リクナビ」の会員を対象に行ったものであるため、その影響である点を考慮する必要がある。)

自国以外の国/地域では、アメリカ、ヨーロッパの人气が高い。

さらに、自国以外の選定率の合計を見ると、中国、香港、シンガポール

の学生は、自国以外で働くことを視野に入れている人が多い一方、日本と韓国では少ないことがわかる。

続いて、アジアの学生から、働く場としての日本が、どのようなイメージを持たれているのかを紹介したい(図表2)。日本での就業意向を問うと、中国、シンガポール、香港、台湾、韓国の順に高かった。

働く場としての日本の魅力についての各項目の選択率は、台湾、中国、シンガポール、香港、韓国の順に総じて高い。香港の学生からのキャリア、報酬面での魅力が低いことを除くと、波形の地域差はそれほどなく、知識・スキル、語学力が得られることを魅力と感じる人が多い。

日本の学生のアジアでの就業意向は、シンガポール、香港、台湾、韓国、中国の順に高い(図表3)。ただし、

シンガポールでも平均値が3を下回り、積極的に働きたいとは言えない。アジア学生の日本での就業意向の平均値が、韓国以外は3を上回っていることと対照的である。

働く場としてのアジアの魅力も総じて低い傾向で、「語学力が得られる」「成長できる」以外はほぼすべての項目で平均値が3を下回っている。特に、技術水準、報酬、生活水準の魅力が低く、中国では特にその傾向が顕著である。

日本とアジアの学生のキャリアの志向

では、こうした日本およびアジア各地域の学生のキャリアの志向には、どんな違いがあるだろうか。

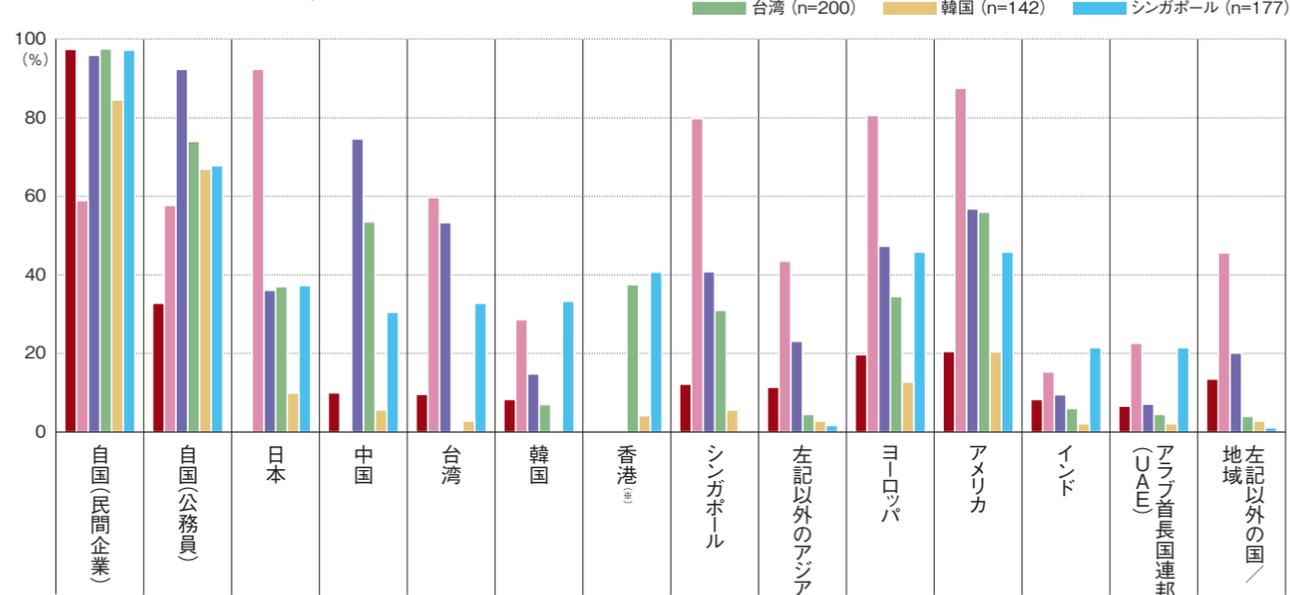
まず、就職を希望する企業規模の回答状況を見ると、日本、中国および

韓国の学生は、1000人以上の大企業、その他の国/地域は1000人未満の中堅・中小企業への就職を希望する人が多く、大きく傾向が異なることがわかる(図表4)。

将来のキャリアイメージについても、日本およびアジア各地域の学生には、大きな違いがみられる。日本に比べ、アジア各地域には、経営者になることや独立を望む学生が多く、特にシンガポールと香港で顕著である(図表5)。また、中国については、「出世にこだわらず働きたい」と考える学生が少ないことから、出世を重視する傾向が推察される。どの地域も、専門家志向、管理職志向があると答える学生が多いのは共通である。

ただし、日本の学生は、ほぼすべての項目で、「あてはまる」と答える学生が他の地域に比べ少なく、将来の

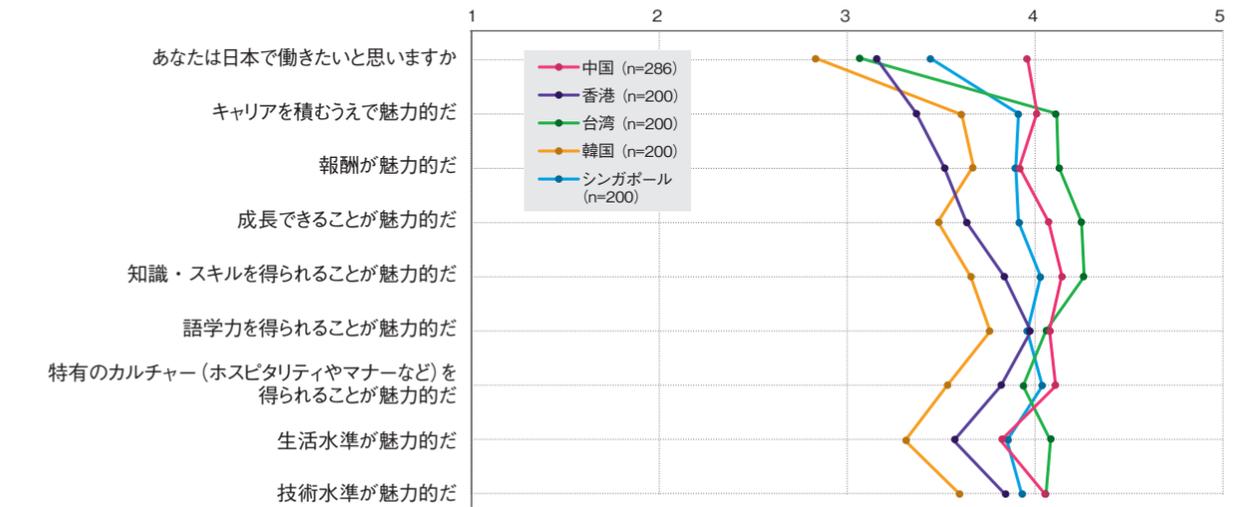
図表1 各国/地域学生が、就職先として検討する国/地域



注1 上記の選択肢について、就職先として考えているか、いないかをそれぞれたずねた。注2「大学を卒業後、就職を考えている」と回答した学生のみ回答。
 (※) 台湾、韓国、シンガポールのみ聴取。

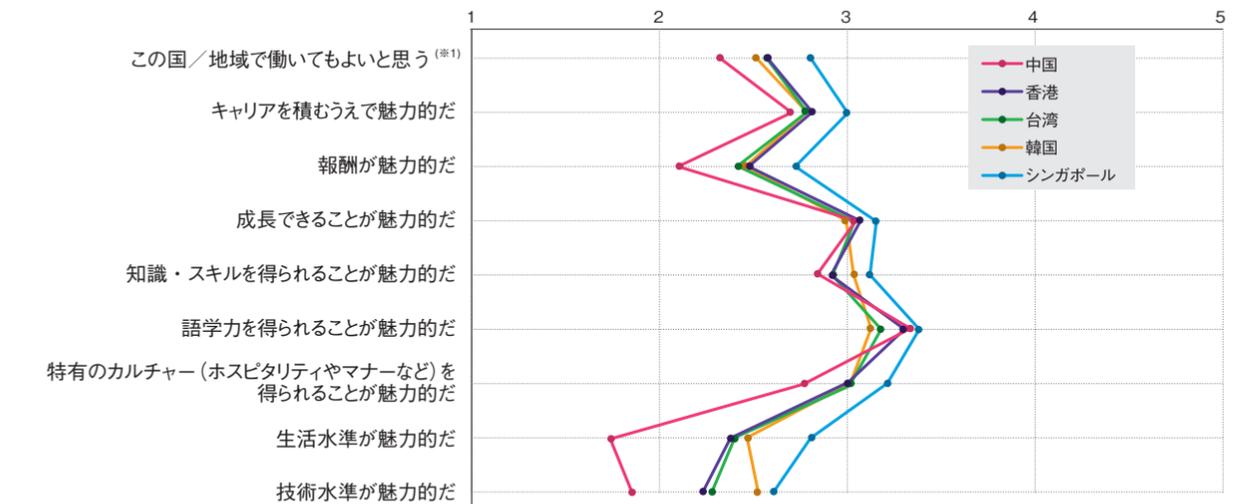
参考	日本	中国	香港	台湾	韓国	シンガポール
自国以外の選択率の合計	120.1	671.7	383.4	275.5	71.1	311.9

図表2 アジアの学生からみた働く場としての日本(単一回答)



<算出方法> 各項目について、「あてはまらない」1点、「あまりあてはまらない」2点、「どちらともいえない」3点、「ややあてはまる」4点、「あてはまる」5点で得点化し、平均値を算出。

図表3 日本の学生からみた「働く場としてのアジア各国/地域」(単一回答)



<算出方法> 各項目について、「あてはまらない」1点、「あまりあてはまらない」2点、「どちらともいえない」3点、「ややあてはまる」4点、「あてはまる」5点で得点化し、平均値を算出。
 (※1) 選択肢である5つの国/地域について、働いてもよいと思うかどうかについて、それぞれ上記の5段階でたずねた。

キャリアイメージが明確でない学生が一定数存在することが推察される。

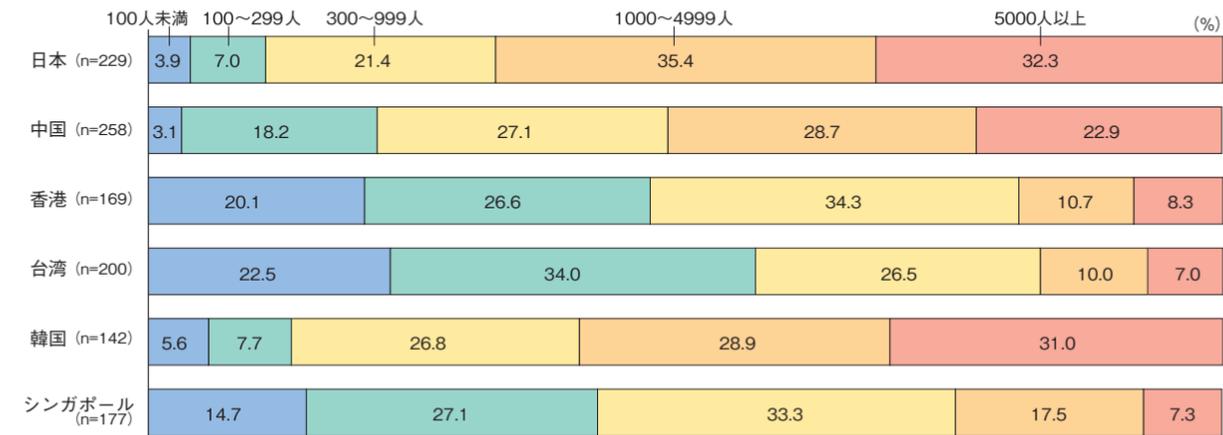
働きたい組織観についても、地域によって回答傾向の違いが見られる(図表6)。まず、成長の仕方について、韓国、台湾、香港、中国の学生は、学業などこれまでの経験を活かして成長できる組織を望むのに対し、日本や

シンガポールの学生は、これまでの経験との接続を重視していない。また、台湾、中国、韓国の学生は、会社のノウハウを学ぶことで成長する組織を望むのに対し、香港、日本、シンガポールの学生はそれほど望んでいない。成長のスピードについても差が見られ、中国や台湾の学生が、短期で成長できるがストレスもかかる組織

を望む傾向があるのに対し、日本と韓国の学生は、逆の傾向が見られた。

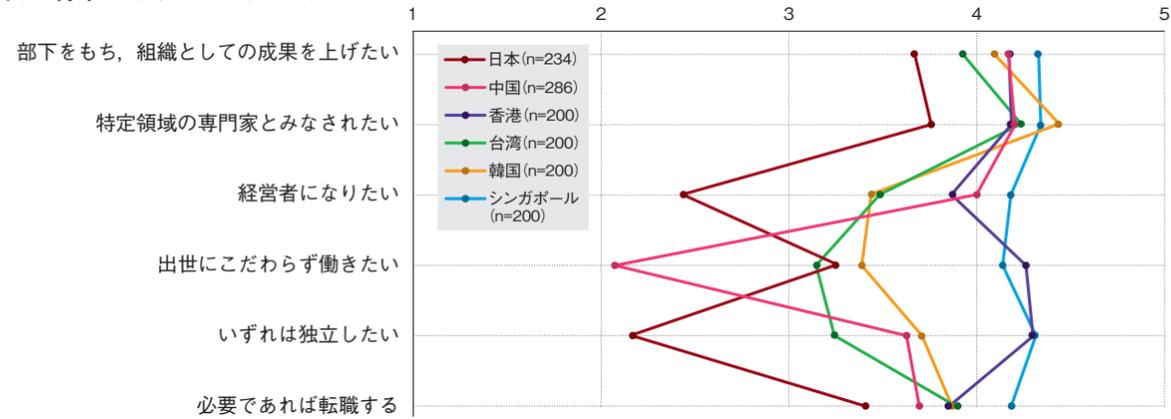
一方で、国/地域の差が小さい項目もあった。「コミュニケーションが密で、一体感を求められる」「仕事と私生活のバランスを自分でコントロールできる」「幅広く多様な人と、人間関係を築ける」については、どの国/地域でも共通して、望む人が

図表4 就職を希望する企業規模 (単一回答)



※「大学を卒業後、就職を考えている」と回答した学生のみ回答。

図表5 将来のキャリア・イメージ (単一回答)



<算出方法> 各項目について、「あてはまらない」1点、「あまりあてはまらない」2点、「どちらともいえない」3点、「ややあてはまる」4点、「あてはまる」5点で得点化し、平均値を算出。

多い傾向が見られた。

大学におけるグローバル人材育成へのインサイト

以上、駆け足での調査報告となったが、最後に、日本の大学におけるグローバル人材の育成に向けた課題について触れておきたい。

今回の調査結果から、日本の学生には、大企業志向が強い、将来のキャリア・イメージが明確でない、グローバルな就業意向が弱い、といった特徴が浮かび上がった。こうした学生たちの中から、グローバル人材を育

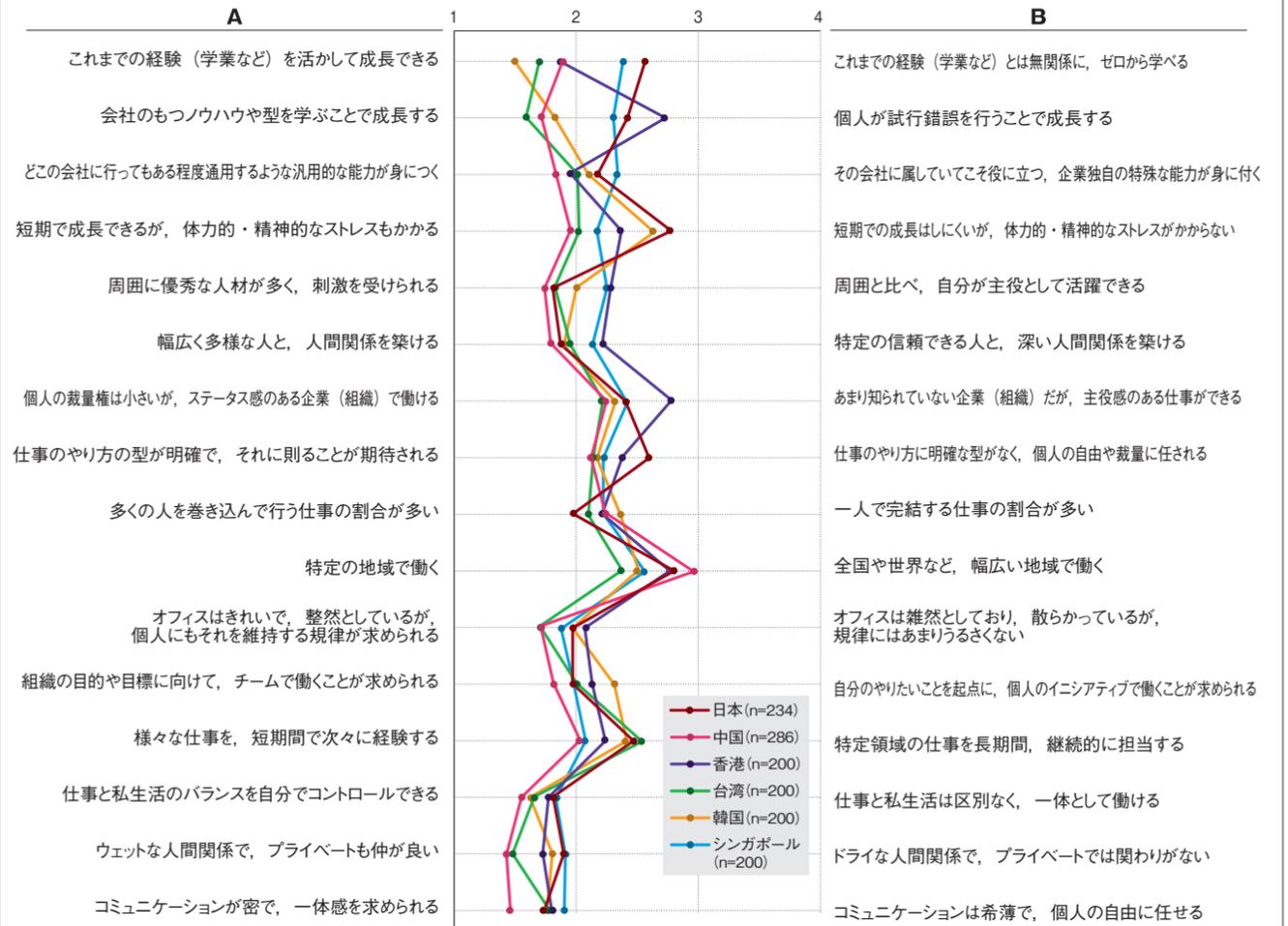
成・輩出するのは容易なことではないと考える。

しかし、先進的な日本企業からは、「今後、アジアをワンマーケットと見立てるのであれば、日本の大学からの新卒採用は一つの選択肢に過ぎない。」という声を聞く。今期「Work in Japan」は中国以外のアジアでも展開を予定している。日本の学生が将来のグローバルなビジネス・リーダー、トップ・エンジニアを志向するのであれば、ライバルは隣の日本人ではなく、アジア各国の学生たちという時代がもう訪れつつある。日本

の大学にとっても、グローバル人材の育成は待ったなしの状況といえるが、各大学による試行錯誤の段階にあるのではないだろうか。

各種の育成施策を検討されていることと思うが、その中で、多くの日本の学生がアジアの学生たちと切磋琢磨することで磨かれるような、他流試合の機会を提供してもらいたいと願ってやまない。太平の眠りを覚ます黒船としての、優秀な外国人学生との交流ほど有効な施策はないと考える。

図表6 働きたい組織観 (単一回答)



<算出方法> 各項目について、「Aに近い」1点、「どちらかといえばA」2点、「どちらかといえばB」3点、「Bに近い」4点で得点化し、平均値を算出。

調査概要

【調査名】:就業意識に関するアジア学生調査
 目的:アジア各国/地域および日本の学生のキャリアイメージや、グローバルに働くことへの意識を把握することで、関係各位の参考に供する
 方法:WEBアンケート(日本,中国),街頭調査(香港,台湾,韓国,シンガポール)

【期 間】:2011年1月31日~6月2日

【対 象】:<日本>リクルー2012会員うち、2012年3月卒業予定の右記対象校の学生より11,987名にメールで通知した。
 <中国>リクルートグループが保有する中国学生データベースより1,500名にメールで通知し、右記対象校の学生を集計対象とした。
 <香港,台湾,韓国,シンガポール>各地域の右記対象校の学生。

【有効回収数】:計1,320名
 日本234名,中国286名,香港200名,台湾200名,韓国200名,シンガポール200名

- 【調査対象校】
- 日本:早稲田大学,慶應義塾大学,大阪大学,東京外国語大学,神戸大学,北海道大学,名古屋大学,京都大学,東京大学,東北大学,筑波大学,上智大学,一橋大学,九州大学,東京工業大学
 - 中国:香港理工大学 (HKPU), 香港浸會大学 (HKBU), 香港城市大学 (CITY), 中央民族大学, 北京航空航天大学, 中国人民大学, 北京理工大学, 中国农业大学, 北京師範大学, 同濟大学, 華東師範大学, 上海交通大学, 复旦大学, 中山大学, 華南理工大学, 中国科学技術大学, 蘭州大学, 吉林大学, 湖南大学, 中南大学, 国防科技大学, 武漢大学
 - 韓国:ソウル大学, Korea University, YONSEI University
 - シンガポール: National University Of Singapore (NUS), Nanyang Technological University (NTU), Singapore Management University (SMU), SIM University (SIM)
 - 台湾: 台湾大学, 国立清華大学, 交通大學
 - 中国: 华中科技大学, 南京大學, 清華大學, 東南大學, 山東大學, 中國海洋大學, 四川大學, 電子科技大學, 重慶大學, 南開大學, 天津大學, 廈門大學, 大連理工大學, 東北大學, 浙江大學, 西北農林科技大學, 西安交通大學, 西北工業大學, 哈爾濱工業大學